

第 66 回日本チベット学会大会

研究発表要旨

18 世紀後半に於けるラサナンツェシャーレークン (lha sa snang rtse shag las khungs)に関する一考察

黒田有誌 (龍谷大学大学院)

18 世紀後半はチベットの政治の基礎が築かれた時期と言われる。当時のチベットの政治に関しては、その枠組みやカロンのように政治を担った高官に関する研究が行われている。その一方でカロン達の下で政治を担った官僚や役所が、どのように政治に携わっていたのかは不明な点が残る。

本発表では、ラサに於ける訴訟の処理や治安維持を担ったラサナンツェシャーレークン (以下、ナンシャー)について検討を加える。ナンシャーは、駐蔵大臣・摂政・内閣の協議によって、1907 年に設置された 9 つの役所の 1 つであり、1913 年に正式に発足したと言われる。

しかし、ナンシャーは 18 世紀後半には既に存在していたと推測される。18 世紀後半に清朝が発布した「19 条章程」「29 条章程」や同時期にガンデンポタン政権が発行したチベット語文書にその名が見られる。また、同時代の満文檔案にもナンシャーと思われるナンシヒヤやナンツェヒヤが現れる。これらの史料は、ナンシャーの職務や命令系統が読み取れるため、当時のナンシャーがいかなる役所であったか明らかにすることができる。

そこで、本発表では清朝とチベットの史料から、18 世紀後半のナンシャーの職務等を分析する。これを通して、当該時期に於けるチベットの統治体制を解明する一助としたい。

シャーキャ・チョクデン『中観決択』に見るバーヴィヴェーカの世俗観

彭毛才旦 (広島大学大学院)

中観派バーヴィヴェーカは『般若灯論』第 25 章において瑜伽行派の三性説・三無自性説を批判し、もし遍計所執が相無自性であるとするならば、実在する事物に対する損減となってしまふと述べている。また、彼は『論理の炎』第 5 章において唯識説を否定し、極微とその集合体が実有であるという見解を示している。これらの記述を根拠に、ゲルク派の祖ツォンカパと彼の弟子ケドゥブジェは、バーヴィヴェーカが世俗 (言語的慣習) において自相によって成

立する実有を認めていると主張する。これに対し、シャーキャ・チョクデンは、全ての中観派にとって世俗諦とは考察することなしに受け入れるべきものであるという点を指摘し、世俗諦を論理によって措定する中観派は存在せず、バーヴィヴェーカが世俗において自相による成立を認めるという主張に根拠はないと批判する。シャーキャ・チョクデンのツォンカパ批判は、従来様々な視点から研究されてきたバーヴィヴェーカの世俗観を再検討する上で有効な視点を提供するものである。本発表ではシャーキャ・チョクデンの『中観決択』に論じられるバーヴィヴェーカの世俗観に焦点を当て、ツォンカパ等のゲルク派の解釈と比較しながら、その再評価を試みる。

中観派の慈悲観

新井一光（曹洞宗総合研究センター）

ナーガールジュナの『根本中頌』27.30において、仏陀は“憐愍の情から（*anukampām upādāya*）”正法を説いたとされる。しかし、私見によれば、このような理解には仏教思想上から見て大きく次のような二つの問題が認められると思われる。第一に、仏陀が“憐愍の情から”正法を説いたという説は、仏伝が説かれるパーリ資料及びその対応漢訳を参照すれば、必ずしも承認されるものではない。即ち、『五分律』及び『四分律』には、正法を説いた動機としてこの要因は出ていない。第二に、“*anukampām upādāya*”に関して、これを“憐愍の情から”と解釈するのは、厳密な理解ではないと思われる。第一の点において指摘したように、仏陀が正法を説いた動機は所謂“憐愍の情”ではないと考えられるため、この“*upādāya*”を「～から」と解釈するのは、ナーガールジュナの真意を正しく理解したものではない。即ち、この“*anukampām upādāya*”は、「*anukampā*を取り入れて」と理解されるべきであると思われる。また、ここでナーガールジュナは“*anukampā*”を仏陀自身の属性と見なしているのではないと思われる。しかし、後代の註釈者は必ずしもナーガールジュナの意図通りに解釈していないように思われる。本発表ではこれらの点に関して、インド註釈文献とともに、チベットにおける『根本中頌』の註釈、即ち、マチャ・チャンチュブツォンドウの *'Thad pa'i rgyan*、レンダワの *'Thad pa'i snan ba*、ツォンカパの *Rigs pa'i rgya mtsho* における同偈に対する解釈を参照し考察したい。さらに、中観派における所謂慈悲が、後代のチャンドラキールティの『入中論』及び註釈においてどのように空性との関連において基礎付けられているのか考察したい。

ツォンカパの空思想における記述と解釈

野村正次郎（文殊師利大乘仏教会）

ツォンカパの空思想は、法身を実現するために必須のものとして、彼の著作の随所でさまざまに表現されている。それは同時代の弟子たちの言説で補完され、一群の仏教思想コレクションとして、今日まで継承され、人々によって再現されてきた。膨大な情報量をもつこのコレクションには、様々な学説や表現が含まれているが、その表現形式や目的や対象に注目すれば、現象や真理に関する命題を記述しようとするものと、伝統のなかで特定の学説に対する解釈を提示しようとするものと、本質的に異なる二種類のモードがあるといえる。真理に関する記述は、煩悩を断じて解脱するために必要となるものであり、その表現対象はあくまでも客観である。これに対して、命題の記述のための必要な伝統的術語に対する解釈は、あくまでも主観に過ぎない。二つのモードはどちらも必要なものであり、それが異なる学説の自説を個別的に規定可能なものとしている。この方法論は仏教思想全体を通底する表現をダイナミックに構成し、現代のゲルク派伝統僧院でも教育的にも宗教的にも有効なものとして活用され続けている。しかし残念ながら近年のツォンカパ研究のなかには、こうした伝統的視座から乖離してしまったものも多く見受けられる。本発表では、ツォンカパの空思想における記述と解釈という二つのモードとその意義を考察し、彼がもっていた古典的視座とその可能性を明らかにしたい。